ハスカップ栽培の歩み

－ 北海道の場合，海外の場合 －

錦織　正智

注目されるベリー

ブルーベリーやカシスにキイチゴなど，小粒で野趣あふれる風味を持つベリーの自生地では，それぞれの国々，各地域に固有のベリーを楽しむ伝統的な文化があります。そして，限られた範囲の地域や，ある民族だけの楽しみであったベリーの中から，ブルーベリーのように広く知られるものも生まれました。しかし，まだまだ限られた地域だけで利用されているベリーも数多くあります。このなかには健康に良い機能性成分を多く含むものや，園芸植物としての価値を持つものがある可能性の高いことから，世界的に新たなベリーの探索と栽培技術の開発，品種の創生が盛んにおこなわれています。このような中，北海道に自生するハスカップは海外から最も注目されているベリーのひとつです。これまでに北海道立林業試験場では，ハスカップの増殖方法の開発や風味の優れた個体の選抜などに取り組んできました。ここでは，林業試験場での取り組みも含めて，ハスカップ栽培の経緯について紹介します。

クロミノウグイスカグラとケヨノミ

ハスカップと呼ばれる果実をつける木（写真－1）には，ケヨノミ（*Lonicera caerulea* L. subsp. *edulis*（Regel）Hultén）とクロミノウグイスカグラ（*Lonicera caerulea* L. subsp. *edulis*（Regel）Hultén var. *emphyllocalyx*（Maxim.）Nakai）の２種類があります。ケヨノミとクロミノウグイスカグラの違いを挙げると，葉や枝に毛があるものがケヨノミ，毛のないものがクロミノウグイスカグラです。また高地に自生するものがケヨノミ，低地のものがクロミノウグイスカグラです。果実の収穫を目的として，農家で栽培されているものはクロミノウグイスカグラが大半です。

写真－１　ハスカップの果実

樹木の名前（標準和名）であるクロミノウグイスカグラとケヨノミに馴染みのない方でも，これらを総称する呼称“ハスカップ”には，親しみを感じることでしょう。ハスカップの呼称は，伝統的に果実を利用してきたアイヌの言葉に由来しています。北海道大学名誉教授の知里真志保氏が著された分類アイヌ語辞典によると，ハスカップの語源は“has（木の枝）ka（の上）o（にたくさんなる）p（もの）”を意味する言葉が“はシカプ（has-kap）”に転訛したものであるといわれています。また，アイヌ語では“ユノミ”とも呼ばれますが，これは“エヌミタンネ（e（頭）númi（の粒）tanne（長い））”が“エノミ”と短縮されて，“ユノミ”へと訛ったと言われています。

標準和名よりも慣用名“ハスカップ”の認知度が高い理由は，“ハスカップ”の呼称がハスカップ製品の普及で広まったことによるといわれています。ハスカップ製品の誕生は，1933年に国鉄の沼ノ端駅（苫小牧市）で個人経営の待合所を開業した近藤武雄氏がハスカップ羊羹とハスカップ最中を考案したことにはじまり，このハスカップ羊羹は1936年に陸軍特別大演習で来道された天皇陛下に献上され

たことが記録されています。それから現在に至るまで，ハスカップ製品はケーキやゼリー，ジャムやワインなど種類も増え，北海道を代表する観光土産として成長するとともに“ハスカップ”の呼称も全国的に広がりました。

野生植物から栽培植物へ

学名が意味する“青い実をつけるスイカズラ属の植物（*Lonicera caerulea*）”の仲間（亜種，変種をまとめて，以降の文章では，これらを便宜的にハスカップと記すことにします）は，アジア，ヨーロッパ，北アメリカに９種類が自生しています。この中で食用として利用されるのは，北海道とロシアに自生するハスカップだけです。北海道のハスカップは，栽培植物としての地位を確立していますが，北海道でも海外でも野生の果実を摘んで利用していた時代を除くと，組織的に栽培化や品種の開発に取り組くんだ歴史は古いことではありません。

北海道における人とハスカップの関係は，タラの芽やギョウジャニンニク，ウドなどの山菜との関係と同じように，季節になると地域の人が野生の植物から果実を収穫することが，本来の人とハスカップとの間柄でした。しかし，今では土地開発により自生地は縮小し，この関係は昔のものになりました。“野生の植物から収穫する”関係から，“栽培した植物から収穫する”関係へ変わったのは1960年代後半のことです。この変化は，ハスカップの大群生地があった苫小牧や千歳を中心とする胆振地方ではじまりました。

苫小牧市の場合，1970年７月に閣議決定された第３期北海道総合開発計画に基づいて策定された「苫小牧東部大規模工業基地開発基本計画」により，自生地が開発の対象になったことが契機になりました。苫小牧郷土文化研究会のハスカップ保護の要望に応えて，市や㈱苫東などは，開発対象の自生地からのハスカップの搬出と移植を進めました。搬出されるハスカップの受け入れ希望は全道から寄せられ，ハスカップが野生植物から栽培植物へ移行するはじまりになりました。

千歳市の場合，1960年代には篤農家が栽培を始め，1970年代に入ると千歳市農業協同組合が農家の転作田の転換作物としてハスカップの栽培を勧めたことで，組織的な栽培がはじまりました。この頃，新千歳空港の建設で自生地が壊されることになり，空港や周辺の航空自衛隊や陸上自衛隊の敷地内から自生のハスカップが搬出され，これが農家の栽培に利用されました。その後，千歳市農協では栽培株から優良な個体の選抜と組織培養を用いた選抜個体のクローン増殖に取り組み，形質が優れた個体の増殖を進めました。

野生植物であったハスカップが栽培植物としての地位を確かにする過程には，品種の誕生や品種の普及に寄与するクローン増殖技術の確立も貢献しました。北海道立中央農業試験場では，ハスカップ自生地（苫小牧市沼の端）の自生株やそれらに由来する実生株などの中から日本で初めてのハスカップ品種「ゆうふつ」となる個体を1986年に選抜し，挿し木や組織培養によるクローン増殖方法の技術開発にも取り組みました。

北海道立林業試験場ではハスカップを含む幅広い園芸用樹木のクローン増殖に汎用性が高い組織培養を活用した苗木生産システムを開発し，2004年に民間企業へ技術移転しました。その後，移転先企業と美唄市農業共同組合との連携により実用的な技術へ発展した苗木生産システムは，美唄市が2006年度より３カ年取り組んだハスカップ生産拡大事業のなかで，優良ハスカップ苗木を農家へ約２万本を供給することに貢献しました（写真－2）。また林業試験場道北支場（中川町）では，中川町役場からの受託研究（2003－2005年度）において，優良ハスカップの選抜とクローン増殖に取り組み，中川町内へ優良ハスカップの普及を進めました。

写真－２　組織培養で増殖したハスカップのクローン苗木の養成過程（於：JAびばい）

ロシアでは，農作物において生物多様性を守るシードバンクの大切さを世界で最初に説き，世界最大の植物種子コレクションを創出したロシアの生物学者，N・I・バビロフの名を冠したサンクトペテルブルク市にあるバビロフ研究所（連邦植物栽培研究所）において，1950年代以来，ソビエト連邦時代から野生種の収集と育種に取り組み，多くの品種を輩出しています。

米国で注目されるハスカップ

筆者が米国でもハスカップ研究の取り組みが進んでいることを耳にして，実情を見聞するためにオレゴン州を訪ねたのは2002年11月でした。ハスカップ研究の第一人者であるオレゴン州立大学のMaxine Thompson博士を訪問しました（写真　3）。Thompson博士がハスカップと初めて出会った1990年のバビロフ研究所（ロシア）でのこと。このときのハスカップの印象は興味を惹くものではなかったそうです。その後，中国で接したハスカップによりオレゴン州への導入を思い立ち，中国からタネを持ち帰ったそうです。後に，遺伝資源収集を目的としてロシアを再訪され，2000年には北海道にも来られました。

Thompson博士の遺伝資源収集の成果である北海道産，ロシア産，中国産のハスカップが並ぶ圃場は，オレゴン州Corvallisにある米国農務省National Clonal Germplasm Repositoryと隣接していました。National Clonal Germplasm Repositoryは，政府の機関としてベリー類やナッツ類の遺伝資源の収集

写真－３　ハスカップ圃場におけるThompson博士（写真左）とGilbert氏（写真右 最後尾）

と希望者への提供を業務としています。このことから，ハスカップ圃場の環境は，ハスカップの普及にふさわしい印象を受けました。Thompson博士は筆者を圃場へ案内し，各国から集めたハスカップを指しながら，樹形や開花時期の変異幅が大きいことや，ロシア産ハスカップの開花時期はオレゴンの気候では少し早く，開花適性は北海道産ハスカップが優れていることをお話してくださいました。そして，訪米からかなりの時間が過ぎた頃，Thompson博士からのメールで“北海道を訪れた際，美唄市峰延の農家から持ち帰ったものの中から，オレゴン州で普及させるのに有望な個体が見つかった”と連絡をいただき，この内容は，米国でのハスカップの普及に北海道産ハスカップが重要な役割を担うことを予見させるものでした。

写真－４　米国ナーセリーにおける様々なベリー製品（左）とハスカップの加工品（右）の陳列

筆者が訪ねたもうひとりは，オレゴン州Molallaにあるナーセリー“One green world”のオーナーJim Gilbert氏（写真－３）です。Gilbert氏は，品種開発が進んでいたロシアから品種を米国に導入した第一人者であり，訪ねたときには北海道産ハスカップの遺伝資源の収集にも取り組まれていました。Gilbert氏はハスカップのほかにも海外から珍しいベリーを導入するのに併せて，ベリーの加工品も入手して，珍しい植物とともに果実の用途も紹介されていました。ナーセリーの事務所には，ロシア，中国などのベリー製品が並ぶ棚のなかでも，北海道産のハスカップ製品はおおきな場所を占めていました（写真－４）。

カナダで注目されるハスカップ

2007年の新聞にカナダのサスカチュワン州の農家やサスカチュワン大学（University of Saskatchewan）の研究者などでつくるNPO法人「パークランド・アグロフォレストリー・プロダクツ」の関係者が道内産ハスカップ栽培と市場調査を目的として，美唄市を含むハスカップの生産地や道立食品加工研究センター，加工業者などを視察した記事が載りました。サスカチュワン大学でのハスカップ研究は，1998年に米国のナーセリー“One green world”からロシア産４品種を購入したことにはじまり，その後，ロシアなどから遺伝資源を収集するとともに，2004年にはThompson博士より，北海道産のハスカップを入手し，これらの遺伝資源から品種の育成を精力的に進めています。2007年には，ロシア産と千島産の雑種から品種を育成し，営利栽培向け品種“Tundra”と家庭栽培向け品種“Borealis”をリリースしました。サスカチュワン大学におけるハスカップ研究の歴史はわずかに十余年間ながら，品種を生み出し，この苗木を普及させ，市場の開拓を意識する段階に至ったことには，目を見張るものがあります。北海道での組織的な栽培化・品種化の歴史が約30年であることを考えると，カナダでの過程は，北海道における時間を凝縮した精力的な取り組みである印象を受けます。

ハスカップは何と呼ばれるのか？

米国とカナダではハスカップの導入と品種の育成に精力的に取り組んでおり，対象としているのは北海道産とロシア産に由来するものです。この状況下でハスカップの呼称は，主に“ブルー・ハニーサックル（Blue Honeysuckle）”，“ハニーベリー（Honeyberry）”，“ハスカップ（Haskap）”の３とおりが使われており，それぞれの呼び方には，次の背景があります。

“ブルー・ハニーサックル（Blue Honeysuckle）”命名の由来は，ロシア語（Ｔемно-синие ягоды жимолости）からの英訳であると紹介されています。ロシア名が語源となっていますが，この呼称を用いる資料からは，特に原産地や苗木や果実の用途には，こだわりのない呼び方である印象を受けます。

“ハニーベリー（Honeyberry）”の呼び方は，Gilbert氏がロシア産ハスカップの苗木を自社で販売する際に作った新語です。このことから，呼称“ハニーベリー”には商標的な背景があります。ロシア産ハスカップの北米での販売は，ナーセリー“One green world”が先駆的であり，“One green world”の販売する苗木の普及に伴ってハニーベリーの呼び方も広まりました。今では本来の商標的な呼称としてだけではなく，一般的な名詞として使われている場面に出会うこともあります。最近では，日本の苗木業者が北海道産ハスカップをハニーベリーと呼ぶこともありますが，呼称の由来を考えると，ふさわしくない使い方であるといえます。

“ハスカップ（Haskap，Haskappu, Hascap, Hascup）”の呼称が使われる場合は，次の３つのいずれかを理由にしています。①北海道産ハスカップに由来するものであること，②北海道産ハスカップと同品質の果実を付けるものであること，③将来の果実の輸出先に日本を想定していること。特にカナダでは，呼称“ハスカップ”が普及しているように思われます。

ある野生植物が栽培植物へ変わり，自生地から栽培地へ伝播する過程と，その植物の名前が様々な背景の下に変遷する様子に触れる機会は，そう多いことではありません。今，北海道産ハスカップは，この渦中にあります。これから，ハスカップの栽培はどのようなスケールへ進展するのでしょう？　そして，北海道を離れた地でハスカップはどのような呼び方で親しまれるのでしょう？　北海道発のベリーとして，これからが楽しみです。

本文は，次の資料を参考にしました。

・奥津 義広　（1979）苫郷文研まめほん１ハスカップ物語，苫小牧郷土文化研究会まめほん編集部発行
・田中静幸ほか（1994）ハスカップ新品種「ゆうふつ」の育成について
　北海道立農業試験場集報第67号：29－41
・知里真志保（1975）　知里真志保著作集別巻Ⅰ所収分類アイヌ語辞典　植物・動物編
・苫小牧市立沼ノ端小学校100周年記念誌「沼小100年の歩み」
　http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/numanohata-s/history.html

（管理技術科）